

# Ashdown Labs Series MK500 head

Track38,39



THE BASS INSTRUMENTS 2  
**Ashdown  
Engineering**

巧者マーク・キングの指向を汲んだ  
クリアなサウンドを放つ真紅のヘッドアンプ

## front & rear view



MK500ヘッドの前面パネル。中央に配したグラフィックが印象的だ。アッシュダウンのトレードマークであるVUメーターはもちろん採用されているが、電源スイッチが青く輝くなど、近代的なルックスを持つ。またインプットはフォンジャックに加え、XLR端子も備える。

背面パネルの様子。入出力はエフェクトのセンド/リターンとスピーカー・アウトのみ、とシンプル。ラックに組み込むことを想定して、XLRアウトなどの端子は前面パネルに集約されている。スピーカー・アウトはスピコンとフォーン・ジャックに対応。

### SPECIFICATIONS

●出力：500W RMS (4Ω) ●入出力：インプット(フォンジャック、XLR)、DIアウト、チューナー・アウト、ライン・アウト、エフェクト・センド/リターン、スピーカー・アウト(1/4ジャック、スピコン) ●コントロール：インプット、ハーモニック・エンファシス・レベル、ハーモニック・エンファシス・イン/アウト・スイッチ、スライダ(30Hz、40Hz、60Hz、100Hz、180Hz、340Hz、660Hz、1.3kHz、2.6kHz、5kHz、10kHz、15kHz)、イコライゼーション・イン/アウト・スイッチ、XLRプリ/ポストEQスイッチ、アウトプット・ミュート・スイッチ、アウトプット ●サイズ：525(W)×195(H)×325(D)mm (2Uサイズ) ●重量：14kg ●価格：¥157,500

新しく登場したラボ・シリーズのMK500ヘッドは、アッシュダウンの愛用者として知られるマーク・キングのシグネチャー・モデルとして開発された。鮮やかな赤を採用したデザインだけでなく、音作りの機能や操作性の面でも、これまでの同社のアンプとは一線を画したものだ。12バンドのグラフィックEQを装備しているのが大きな特徴で、30Hz～15kHzという、ベースにとって大切な帯域において緻密な音作りが可能となっている。新機能のハーモニック・エンファシスはベースの倍音を強調して高域のヌケの良さを作り出すもので、特にスラップを多用するベーシストは重宝するだろう。見た目のインパクトに反して、シンプルな操作性が持ち味のアンプだが、XLR端子のバランス入力、エフェクト・センド/リターン端子も備えたプロ仕様のモデルで、ラック・マウントが可能な点も、ツアーなどが多いベーシストには見逃せないポイントだろう。



12バンドのグラフィックEQを装備。ベースのサウンドを調整するのに必要な周波数帯域はほぼ網羅している。



原音に新しく生成された倍音を足すハーモニック・エンファシスは、イコライザーの機能とは違った明るくハリのある音を作り出す。

### Sato's Impression

これまでのブランド・イメージを大きく変えるクリアなサウンドです。



これまで僕の持っていたアッシュダウンのイメージを完全に変えましたね。まず音を出したときの第一印象は、ツブ立ちが良くて"ド"クリーン。ベースの音をクリアに出力するから、プレイに関してはごまかしはきかない。いかにも"うまいベーシストが使ってそうなアンプ"っていう感じです(笑)。

### おすすめセッティング Track39 (Track38=フラット)



このアンプは、幅広いサウンドを作り出す、というよりは、良い意味で音色のバリエーションの幅をギュッと絞っているように思います。なので奇をてらったものではなく、あくまで原音を生かす音作りをしてみました。